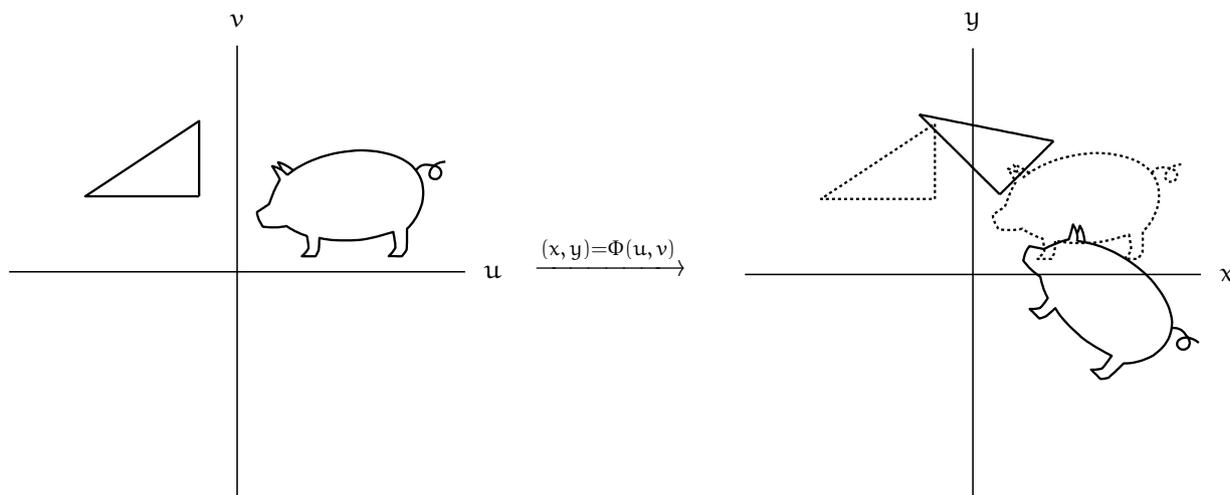


★ 変数変換の例

(a) $x = u \cos \theta - v \sin \theta, y = u \sin \theta + v \cos \theta$ ($0 \leq \theta \leq 2\pi$)

原点の周りを反時計回りに θ だけ回転させる写像である (下図は $\theta = -\frac{\pi}{4}$)。これを行列で表わすことができる (すなわち、線形写像である) :

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u \\ v \end{pmatrix}$$

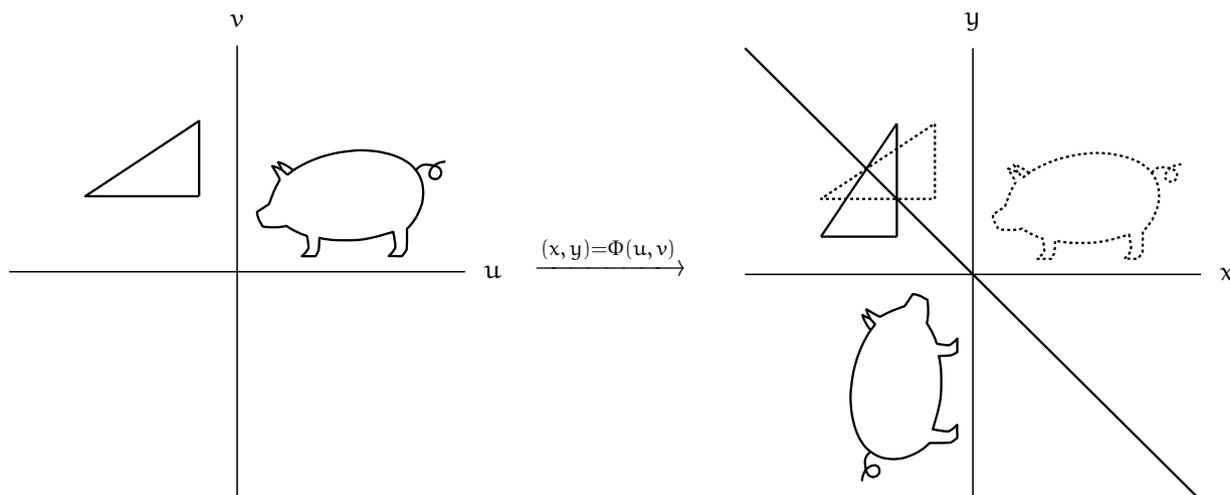


(b) $x = u - \frac{2\alpha(\alpha u + \beta v)}{\alpha^2 + \beta^2}, y = v - \frac{2\beta(\alpha u + \beta v)}{\alpha^2 + \beta^2}$ ($\alpha, \beta \in \mathbb{R}$)

ベクトル $w = \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix}$ と直交する直線 $\alpha u + \beta v = 0$ に対し対称に移す写像で (下図は $w = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$)、これを鏡

映変換という。これをベクトルで表すと、 $X = U - \frac{2U \cdot w}{w \cdot w} w$, ここで、 $X = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, U = \begin{pmatrix} u \\ v \end{pmatrix}$. これも行列の形にかける (すなわち、線形写像である) :

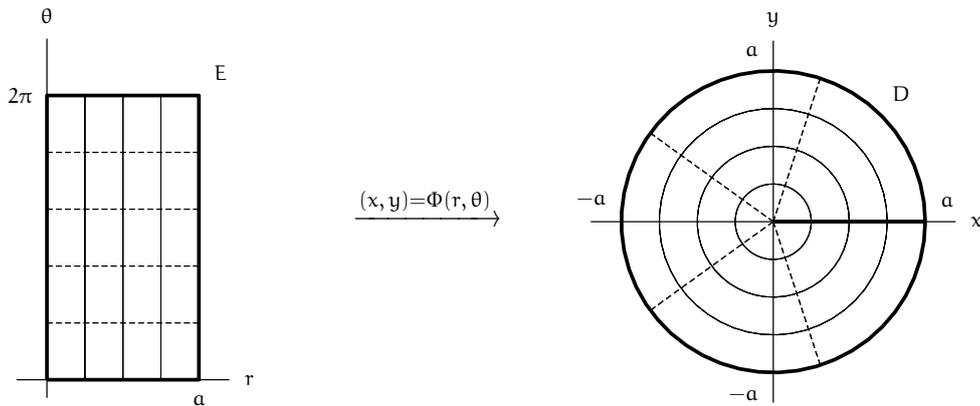
$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{-\alpha^2 + \beta^2}{\alpha^2 + \beta^2} & -\frac{2\alpha\beta}{\alpha^2 + \beta^2} \\ -\frac{2\alpha\beta}{\alpha^2 + \beta^2} & \frac{\alpha^2 - \beta^2}{\alpha^2 + \beta^2} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u \\ v \end{pmatrix}$$



(c) 極座標変換 $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$.

ただし、 $E = \{(r, \theta) \mid 0 \leq r \leq a, 0 \leq \theta \leq 2\pi\}$, $D = \{(x, y) \mid x^2 + y^2 \leq a^2\}$ ($a > 0$).

よく使われる変数変換。 $\theta = (\text{一定})$ の線分 (破線) と $r = (\text{一定})$ の線分 (実線) がどのように移るかよく考えてみてほしい。また、上の 2 例とは違い、行列で表わすことはできない (線形写像ではない)。



(d) $x = u^2 - v^2, y = 2uv$. ただし、 $E = \{(u, v) \mid u \geq 0, v \geq 0\}$, $D = \{(x, y) \mid y \geq 0\}$.

これを複素座標平面 $z = u + iv$ で考えると、 $f(z) = z^2$ と表せられ、原点の周りを回りながら、原点方向に向かって伸縮するような写像となる ($z = r(\cos \theta + i \sin \theta)$ と書くと、 $f(z) = r^2(\cos 2\theta + i \sin 2\theta)$)。また、この写像は図形の角度を保つため、等角写像と呼ばれる。実際、格子を写像で移すと歪んでしまうが、直角は保たれている。また、三角形の角度も保たれていることがわかる。これもまた線形写像ではない。

